

「ICRC（赤十字国際委員会）イラク被災者救援事業に参加して」

国際救援部 渡瀬 淳一郎

去る8月から10月にかけて、イラク被災者救援事業に派遣されました。イラク第2の都市、モスルにおける紛争に対して赤十字国際委員会が外科手術チームを編成し戦傷外科治療を行ったもので、私は救急医として2月に次いで2度目の派遣、モスル総合病院のERにおいて地元スタッフと協働しながら、戦傷外傷患者の治療に従事しました。

今回は戦場に極めて近いため、怪我をして間もない兵士や一般市民の方々が地雷や爆弾、銃弾により身体に多くの傷を負い、痛みを苦しみながら運ばれてきます。ERは途端に戦場になります。迅速に損傷具合や重傷度を把握し救命治療を行っていく一方で、速やかに痛み止めを投与し、痛みを軽くしてあげなければなりません。混沌とした中、地元スタッフと力を合わせて治療をすすめていきます。次から次へと患者が運ばれてきても、茫然自失する時間はありません。人もモノも足りない中で、できることを最大限やっていきます。

しかし、とりわけ大事なことは、自身の安全を確保することです。イラク軍の負傷兵に付き添う兵士は非常に興奮しています。銃携帯禁止の警告にも構わず、銃を持って入ってきます。彼らに銃を病院の外に出すよう丁寧に要請します。それでも言うことを聞かない兵士の前での治療は非常な緊張を伴いました。

また、対立勢力のご家族と思われる女性や子供が患者として来た時、地元スタッフの消極的な態度は明らかでした。3年間、尋常ではない閉ざされた生活を強要されたり、親しい人を失ったりした彼らの気持ちはいかばかりかと思います。中立、公平を旨とする赤十字の私達が戦地には必要とされる理由の一端が垣間見えた気がしました。

いつも赤十字の人道支援にご理解をいただき誠にありがとうございます。今日も爆弾で傷つき、命を落とす人がいます。これからも皆様と一緒にできる限り彼らに寄り添っていただければと思います。年末の「NHK海外たすけあい」募金は日赤の人道支援活動に生かされています。ご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



宿舎から病院への通勤風景



多数傷病者が来た時の初療の様子

ICRC スタッフと地元スタッフで協働します。



病院の3、4階は反政府組織に火を放たれ使用不能



ICRC スタッフ、地元看護師、通訳と